

終末、クリスチャンの日**マタイ25:31~46 / 李正雨師**

今日は、教会カレンダーでは、聖霊降臨後最終主日です。今日を最後にして、来週からは待降節が始まります。主が来られる日を待ち望む日が始まるのです。教会では、伝統的にこの11月の最終主日とその年の終わりと思っています。待降節が始まる12月からは、新しい年になるのです。それで、私がいた韓国ルーテル教会では、11月の最終主日に教会総会を開き、一年を決算し、新しい一年の計画と予算を立てます。教職者、特に副教職者の異動も通常12月に行われます。そのため、1月からは副教職者たちも、それぞれ派遣された教会で本格的に仕事を始めることができます。教会の役員も、12月から変わります。つまり、教会カレンダーの11月の最終主日は、その年の最終主日なのです。

今年の最終主日である今日、私たちに与えられた福音書は、マタイによる福音書25章の最後のたとえです。私たちは、この2週間、マタイによる福音書25章の言葉をもって説教を聞きました。10人のおとめのたとえとタラントンのたとえでした。このたとえは、知恵についてのことであり、賢い者は未来を準備するというのがこの2週間の御言葉でした。そして今日は、マタイによる福音書25章の最後のたとえであるイエス様の裁き、終末についてのことです。皆様、この世の終末といえ、どんな感じがしますか。今まで一度も経験したことがないので、分からない恐怖が生まれるでしょう。皆様だけでなく、多くの人も終末に対する漠然とした恐れを持っていると思います。さらに、映画やテレビや新聞などのメディアの影響も少なくありません。自然災害や天体衝突などのニュースは、このような恐怖を増強させます。しかし、この世の終わりというのは、必ずしもこんなふうにかかるわけではありません。

私は、終末というものを、大きく二つに分けることができると思います。一つは、この世の終わりであり、もう一つは、私たちの個人的な終わり、死です。そしてこの二つは、違うように見えますが、究極的には同じものです。世の終末が起きて、死を迎えても、自分自身にとってはみんなが同じ終末になるからです。だから私は、私たちが終末について全く知らないとは思いません。私たちは、家族の死、知り合いの死を通して、間接的に終末を経験しているからです。このように終末を経験している人たちに、聖書は、未来を準備する者、賢い者になりなさいと語ります。それで、終末だけを恐れているのではなく、皆が神の国にふさわしい人になるようにと聖書は望んでいるのです。

今日の福音書で、イエス様はご自分が再び来られる日、終末について話されます。その日を私たちが個人的な終末として迎えるのか、この世の終末として迎えるのかは分かりません。しかし、終末は誰にも来るものであり、その日を準備した人々は、神の国に入ることになるのです。この世は終わり、神の国が始まるのです。そして、その日にイエス様の言葉に従って生きた人々は、みんなが神の国に入ることになります。今日の福音書32~33節によると、すべての民族が、羊飼いが羊と山羊を分けるように分かれるそうです。この言葉は、私たちに緊張させます。このことが、まるで確率のように見えるからです。しかし、この言葉の目的は、誰が神の国に入るのか分からないということではありません。知恵ある者は、神の国を受け継ぐということです。終末の日には知恵ある者たち、未来を準備した者たちは、神の国に入ることになるという御言葉です。34節の言葉です。「王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。』」

ここで聖書は、未来を準備した人々、知恵ある人々を右側にいる人だと言います。ユダヤ人の文化によると、王の右側は、栄光と権威と正義などを表します。列王記上2章19節、コヘレトの言葉10章2節、詩篇16編8節、121編5節などにも、右側の栄光と力と正しさについて書かれています。これだけでなく、私たちが毎週告白している使徒信条でも、右側が出てきます。「天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり…」私た

ちは、これを通してイスラエルでの右の意味が何なのかが分かるのです。今日の福音書での王も、自分の右側に未来を準備した人を置きます。彼らの栄光と正しさを表しているのです。そして、なぜ彼らが神の国に入ることができるのかを教えてください。35～36節の言葉です。「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」

ところが、この言葉を聞いた右側の人々は、この王の言葉を不思議に思います。そして自分たちは、そうしたことがないと言います。37～39節で彼らは「わたしたちがいつそのようにしたでしょうか」と尋ねます。すると、王はこう言います。40節の言葉です。「そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』」

多くのクリスチャンは、知恵ある人になるために、終末を準備するために、何をしなければならないかを悩んでいると思います。そして、この悩みはますます大きくなり、クリスチャンに大きな負担を与えていると思います。神の国と永遠の命を得るためには、何か大きな貢献や犠牲をしなければならないのかというプレッシャーもあります。それで、信仰のために命をかけた人々や教会のために犠牲と献身をした人々の話を聞き、彼らの足跡に従おうと努力します。しかし、むしろこのような努力がより大きな負担とプレッシャーになることもあります。このような私たちに、今日の福音書は、小さい者の一人にしたのは、イエス様にしたのと同じだということを教えてください。そしてこれは、私たちが信仰の人として、イエス様の弟子として生きようと努力したとき、自然に得られるものです。私たちが弟子として行うすべてのことは、終末を準備することです。礼拝をささげ、御言葉を聞き、その御言葉通りに小さい者たちを助け、仕えることによって、私たちは終末に神様と清算することができるのです。もしかすると私たちは、自分たちはイエス様のために何もしていないと思うかもしれません。まるで今日の福音書で、王の右側にいる人々のように、「わたしたちは、いつそのようにしたでしょうか」とイエス様に尋ねることもあるでしょう。しかし、イエス様はこれを尋ねる人々に、神の国を受け継ぎなさいと言われます。クリスチャンとして生きようと努力する人々には、神の国が与えられるのです。

だから私は、終末の日は、私たち、クリスチャンの日だと思います。その日に私たちは、信仰の人として生きるために努力したことによって、天の報いを与えられると思います。信仰の人であったので耐えなければならなかったこと、信仰の人であったのでしなければならないこと、このことに対する報いをその日、私たちの終末の日に受けることができるのです。そして、私たちが分からないうちに、神の国が私たちに与えられるのです。マタイによる福音書5章12節で、イエス様はこう言われます。「喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。」終末を恐れない人はいないと思います。特に今日の福音書の言葉のように、王の左側にいる人にとっては、終末がとても恐ろしい日になるでしょう。この世のみんなにとって恐ろしい終末の日ですが、私たちクリスチャンにとっては、その日は私たちの日になるのです。その日に、私たちは笑うようになるのです。

今日の福音書は、イエス様の公的な教えの中で最後の教えです。イエス様は、この教えを終えられてから、二日後に十字架につけられます。イエス様のこの最後の教えを忘れないでください。イエスは、正しい人たちは、永遠の命にあずかると言われました(46節)。この言葉が私たちの最終の日に大きな慰めになってくれるのです。今日、教会カレンダーの最終主日、イエス様はこの世の終末が私たちの日になるということを教えてくださいました。この教えを心に刻み、待降節をお迎えくださいませ。再び来られる主を待ち望む皆様の一日一日が祝福される日になりますように。主が再び来られる日、皆様に天の報いが与えられますように、主の御名によって祈ります。アーメン